OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近世期テニヲハ論の研究
Author(s)	河野, 光将
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69696
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　　名　（　　河野　光将　　）	
論文題名	近世期テニヲハ論の研究

論文内容の要旨

本論文では、近世期のテニヲハ研究について日本語学史的観点から検討を加えた。

まず序論において、従前の日本語学史は、国学者の研究偏重の傾向にあることを指摘し、またその記述も過度に「整理」された形であって、学説の連続性という観点への配慮が不十分であることを述べた。そして、近世期のテニヲハ論を学説の継承性という観点に基づいて、「点」として卓立させた形ではなく、「線」として検討していくことが重要であることを述べた。さらに、従来の日本語学史から疎漏してきた学説についても取り挙げて、検討を行うことで、近世期テニヲハ論を、「面」において把握することが重要であることを述べた。

続いて、こうした問題意識に基づき、近世期のテニヲハ論を具体的に取り挙げ検討を行った。

第1部　テニヲハ研究の通時的展開

第1部では、テニヲハ研究史上高く評価されてきた本居宣長の研究を中心に、宣長以前・宣長以後の2つに分けて、テニヲハ研究の展開過程について検討を加えた。具体的に、指摘したことを以下にまとめる。

第1章では、係り結び研究史において飛躍的発展を成し遂げたとされる本居宣長『てにをは紐鏡』『詞玉緒』について、それ以前の研究との連続性の中において捉え直すことを行った。その結果、『てにをは紐鏡』『詞玉緒』に示される学説は、「係り結び」として捉えるよりも、伝統的歌学が重要視してきた「結び」についての網羅的・総体的研究として捉えるべきであることを明らかにした。そのように理解することによって、従来、『てにをは紐鏡』『詞玉緒』の問題点とされてきた、助詞「の」が立てられている点及び、疑問詞を一括した「何」が立てられていることは、学説内部の整合性を失わせるものではないことを述べた。また、宣長がこうした研究をなしえた背景には、活用研究の発展があったことを指摘した。

第2章では、第1章で示した宣長の学説理解に基づいて、宣長以降の係り結び研究について検討を行った。その結果、『てにをは紐鏡』『詞玉緒』の学説が受容・展開されて行く過程で、宣長の帰納的な「かかり」の規定とは異なる理解がなされたことを明らかにした。宣長説に対する修正が図られるという限りにおいて、宣長の把握とは異なる係り結び理解が生じたと考えるべきであり、具体的には、「かかり」を「結び」に対する形態的限定を加えるものとして把握する理解へと変じたことを指摘した。そうした理解がなされた結果、助詞「の」と疑問詞を一括した「何」が「かかり」から除かれることとなった。また、その背景には、近世後期における品詞論の発展があることについても明らかにした。

第2部　テニヲハ論の諸相

第2部では、従来の学説史から疎漏してきたもののテニヲハ研究史上、重要と考えられる学説について検討を加えた。まずは、近世前期テニヲハ論と後期テニヲハ論に分け、前期テニヲハ論の中では、国学者の研究への影響という観点から歌学・漢語学に対する検討が必要であることを述べた。また、後期テニヲハ論の中では、音義説に基づく学説であっても日本語研究史的観点からの検討が必要であることを述べた。具体的に、指摘したことを以下にまとめる。

第3章では、これまで日本語研究史の間隙となっていた近世前期歌学について検討を行った。その結果、中世歌学

と国学者の研究を繋ぐものとして、その言説が注目されることが明らかとなった。秘伝に対する批判的態度やテニヲハの呼応に関する認識について、これまで国学者の研究によって飛躍的に発展したと考えられてきたが、近世前期歌学に見られる言説の中に、既にそのような言及が存在していることについて述べた。

第4章では、新出資料『和語集解』を取り挙げ、そこに見られる日本語の体系性についての学説の特徴について述べた。形容詞を抽出しようとしている点は、同時代の歌学が「末」の文字による分析を行っていたのに比して注目されることを指摘した。国学者の研究において、形容詞の抽出は活用研究の進展を待たなければならず、持軒の学説はその点において、重要であることを述べた。持軒がこうした分析を行った背景には、漢語学の影響が考えられるが、これまでの日本語研究史においては、主として古文辞学の系統に連なる者の研究が取り挙げられることが多く、今後の学説史記述においては、古文辞学以外も含めた、近世儒家言語論全般に対する検討が必要であることを述べた。

第5章では、第2章で確認した宣長以降の「係り結び」研究の大きな傾向とは異なる立場からの研究として、橘守部『助辞本義一覧』『てにをは童訓』を取り挙げ、その学説について検討を加えた。その結果、従来は音義説に基づいた研究であるといった点のみが注目されてきたが、助詞「の」を排し、助詞「か」を「かかり」と認めているなど、萩原広道『てにをは係辞弁』の学説に繋がるものがあることを明らかにした。また、その原理として、守部は意味的観点から「喚体」に繋がるものに対する区別を行おうとしていたことも指摘した。

第6章では、日本語研究史上対照的な位置づけを与えられてきた、本居春庭と橘守部を取り挙げ、両者の学説に見える研究態度について検討を加えた。その結果、春庭おいては『詞八衢』で、守部においては『助辞本義一覧』に見えるように、言語に対し切分的思考に基づいて分析を行う一方、春庭『詞通路』と守部の三撰格のように現実における現れ方、つまり、言語をその繋がりにおいて把握しようとしている点で両者には共通性があるということを述べた。また、言語をそのように二極分化した形で把握するあり方というものが、近世後期の日本語研究の一つの特徴であることを指摘した。

第7章では、明治期国学への連続性という点から注目されてきた、富樫広蔭『詞玉橘』を取り挙げ、書誌学的観点から諸本の検討を行い、学説の展開過程についての考察を行った。その結果、従来の「草稿本→改稿本→改正本」といった直線的発展と捉えることが難しいことを明らかにした。さらに、同時代的に広蔭の学説がどのように受容されてきたのかについて、『詞玉橘』の学説に対する言及として、石橋真国『語解』を取り挙げて検討を行った。その結果、改正本成立後もそれ以前の段階の学説が普及していた可能性があることを述べた。

終章では、本論で述べたことのまとめを行った後、今後の日本語学史記述の課題についても言及を行った。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　河野光将　）	
論文審査担当者	（職）　氏　名 主査　大阪大学　教授　岡島昭浩 副査　大阪大学　教授　金水　敏 副査　大阪大学　准教授　岸本恵実

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　近世期テニヲハ論の研究

学位申請者　　河野光将

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　岡島昭浩

副査　大阪大学教授　　金水　敏

副査　大阪大学准教授　岸本恵実

【論文内容の要旨】

本論文は、江戸時代の日本語研究史、特にテニヲハ論と呼ばれる研究の歴史を扱ったものである。従来の研究史が取ってきた方法の持つ問題点を克服しようというものであるが、その大きな問題点は、後世の視点から見て、学問の発展に大きく寄与した研究を大きく扱い、同時代的な学問の継承性を等閑視した、というものであった。本論文では、個々の学説を「点」として卓立するのではなく、「線」で把握し直すことで、研究史的意義を明確化することを目指している。

「第１章　宣長以前のテニヲハ研究について」「第２章　宣長以降のテニヲハ研究について」「第３章　近世前期歌論の日本語学史的意義」「第４章　近世前期漢学者における言語研究の諸相」「第５章　テニヲハ研究史における橘守部の位置」「第６章　本居春庭と橘守部」「第７章　『詞玉橋』の学説展開について」からなる。

第１章では、係り結び研究史上、飛躍的発展を遂げたとされる本居宣長の研究について、「係り結び」研究というよりも、伝統的歌学が重要視してきた「結び」の研究であったことを明らかにした。そのように理解することによって、従来、問題点とされてきた、助詞「の」や疑問詞が「かかり」として立てられていることが、学説内部の整合性を失わせるものではないことを論じた。

第２章では、第１章で示した宣長の学説理解に基づいて、宣長以降の係り結び研究について検討を行い、学説が受容・展開されて行く過程で、宣長の「かかり」の規定とは異なる理解が成されたことを明らかにした。それは、「かかり」を「結び」に対する形態的限定を加えるものとして把握することであり、そうした把握がなされた結果、助詞「の」と疑問詞が「かかり」から除かれることとなったことを示した。

第３章では、日本語研究史の間隙となっていた近世前期歌学について検討を行い、テニヲハの呼応に関する認識について、国学者の研究によって見いだされたと考えられてきたものが、近世前期歌学に見られる言説の中に、既に言及されていることを示し、この方面の研究の必要性を説いた。

第４章では、新出資料『和語集解』（五井持軒によるものとされている）が、形容詞を抽出しようとしていることを指摘し、そこに漢語学の影響が考えられることを論じた。

第５章では、第２章で確認した宣長以降の「係り結び」研究の大きな傾向――「かかり」を「結び」に対する形態的限定を加えるものとして把握する――とは異なる立場からの研究として、橘守部を取り挙げて論じた。守

部は意味を重視する研究を行い、「か」による「かかり」を示したが、その研究は、萩原広道の研究とも繋がる部分があることを論じた。

第 6 章では、本居春庭と橘守部を取り挙げ、両者の学説に見える研究態度について検討を加えている。守部は、言葉を 1 音節単位に切り刻んで意味を考える「音義派」の学者として知られるが、その一方で、文章を長い繋がりで捉えようとする研究も行っており、こうした統語的研究の観点は、春庭と通じる部分があることを論じている。

第 7 章では、江戸時代の研究から明治以降の研究への架橋とみなされている富樫広蔭『詞玉橋』を取り挙げ、その著作の諸本の検討を行い、学説の展開過程についての考察を行っている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、テニヲハ論史、特に「係り結び」研究史における本居宣長の位置づけを再考した、たいへん有意義なものである。「再考」と言っても、宣長の研究が平凡なものだった、というのではなく、中世からあった歌学が近世期の学問隆盛の中で発展していったところに、動詞などの活用研究の発展があった、という状況があり、そこに宣長のすぐれた分析が行われた、ということが明らかにされたものである。さらに、宣長以後の学説展開が、現在の学校文法で知られるような「係り結び」、すなわち、「かかり」となる助詞があると「結び」として活用形が指定されるという現象として認識されるようになってゆくことも、明らかにされている。一方で、宣長の意識した「係り結び」の構文論的な面も、後の国学者たちに全く意識されなかったわけではないようだ、ということも示されているが、このあたりは、もう少し詳しく論じて欲しい部分である。

第 3 章の近世前期歌論における語学研究についても、「近世文学の側において既に膨大な蓄積」「聞書をはじめとする近世歌学資料へのアクセスは向上」と記しながら、取り上げている事例が少なく感じられるのは残念である。第 4 章の『和語集解』は、本論文における位置づけが不分明である。第 7 章は、独立した論考としては、有意義だが、本論文の中へ収め切れていない感じが残る。なお、現在における係り結び研究と、江戸時代の「係り結び」研究の比較に、やや性急な部分もあった。

とはいうものの、テニヲハ研究史上における本居宣長の位置づけ、及び、それ以降の研究の位置づけを行った点において本論文が有意義であることは間違いなく、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。